

Title	京大広報 No. 699
Author(s)	
Citation	京大広報 (2014), 699: 4129-4152
Issue Date	2014-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/196373
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



京大広報

No. 699

2014.4



平成26年度紅萌祭

目次

京都大学大学院総合生存学館(思修館)の開設 総合生存学館長 川井 秀一	4130
〈大学の動き〉	
監事が発令される	4132
副理事が発令される	4132
理事補が発令される	4132
部局長の交替等	4132
平成25年度京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)表彰式を举行	4135
平成26年度入学選抜学力試験(個別学力検査)の結果	4136
平成25年度京都大学総長賞表彰式を举行	4137
〈部局の動き〉	
寄附講座・寄附研究部門の設置, 更新	4138
〈寸言〉	
“C&C”と VISIONARY 秋津 勝彦	4142
〈随想〉	
IT を使って過去から未来を読む 名誉教授 星野 聡	4143

〈洛書〉	
「バブル」との出会い 翁 邦雄	4144
〈栄誉〉	
中島 啓数理解析研究所教授, 田中紘一名誉教授が日本学士院賞を受賞	4145
稲葉カヨ 男女共同参画担当副学長・生命科学研究科教授がロレアル・ユネスコ女性科学賞を受賞	4146
〈話題〉	
ベトナム教育訓練省代表団一行が, 地球環境学 堂・学舎を訪問	4147
平成25年度京都大学防災研究所「研究発表講演 会」を開催	4148
女性研究者支援センター主催・介護に関する 講演会シリーズ(第4回)を開催	4148
女性研究者支援センター主催・ストレスマネジ メント講座を開催	4149
〈計報〉	4149
〈特集〉 「京大ウィークス2013」Vol. 5	4150

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学大学院総合生存学館(思修館)の開設

総合生存学館長 川井 秀一

新大学院設置の経緯と趣旨・目的

平成25年4月、本学に大学院総合生存学館(通称「思修館」)が設置されました。この新大学院の構想は、松本 紘総長の強いリーダーシップのもとで、新大学院(仮称)設置準備室要項(平成23年2月8日総長裁定)が制定されたところから始まり、大学院思修館設置準備室要項への改正(平成23年11月22日全部改正)を経て、平成23年度文部科学省博士課程教育リーディングプログラム(オールラウンド型)「京都大学大学院思修館」の採択の後、大学院総合生存学館の開設となって結実しました。

現代社会が抱える諸問題の多くは、文化、産業、国家、環境などの複雑で巨大なシステムに関わるグローバルな課題であり、その解決には持続可能で創発力のある社会システムの構築が不可欠です。このような新たな社会システム構築に向けて、リーダーシップを発揮できる人材の育成が喫緊の社会課題となっています。思修館はこうした社会の要請に応え、「未来のリーダー」育成を目的に設置された大学院です。一方、思修館の教育研究の基盤は、複合的社会課題を克服するための思想・政策や方法を幅広く探究する学問であり、人類と地球社会の生存を目標とする総合生存学として位置づけられています。総合



生存学では、関係する諸々の学問体系の知を結びつけ、編み直し、駆使して複合的な社会課題の発掘・分析と定式化・構造化を行い、社会実装までの解決を探索する総合学術の構築を目指しています。

思修館の教育

次世代型リーダーを育成するためには、旧来の枠組みの大学院教育では限界があります。そこで、思修館では、5年一貫制の博士課程として、学生個々の目標に応じたテーラーメイド型カリキュラムを組み、主要専門分野の基礎を文理融合で学ぶと共に、産業界や官界と協働し、リーダーシップマインドや論理的な思考力、課題解決に向けた実践力を身につけるためのユニークな教育課程を構築しました。

図は、思修館の教育課程の概要を示したものです。特別研究や特殊研究、各自の専門分野の知識の修得などの高度専門教育のほか、以下に、思修館の特徴的な教育課程を紹介します。

1, 2年次には、対話と討議を主体にした少人数

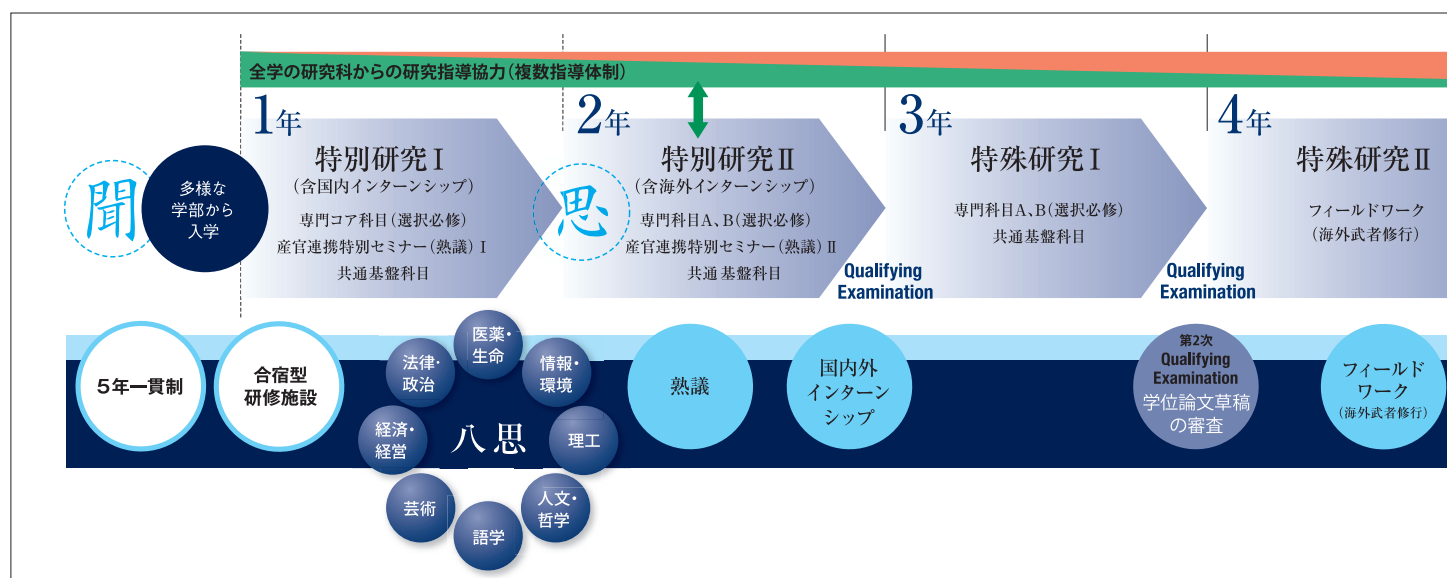


図 思修館の教育カリキュラム

セミナー(熟議)を実施します。熟議の講師には、たとえば、国際機関の理事、総合商社の会長、機械メーカーの社長、経済産業省や文部科学省の元次官など、国際機関、財界、産業界、官界のトップリーダーに講師をお願いしています。

また、国内外インターンシップは、多様な地域・環境における文化や立場への理解を深め、他者のために行動できる社会性や人間性の醸成を目指す実習科目です。1年次は京都市近隣自治体などの協力を得て福祉施設でボランティア活動を、2年次は国際協力機構(JICA)等の協力を得て発展途上国でのインターンシップを経験します。

3年次は文系、理系にまたがる八つの専門分野の基礎(共通基盤科目等)を通じて現代世界の問題を深く考える講義を受けます。これを「八思」と呼んでいます。八思には、茶道、華道、書道といった日本文化を学ぶ講義・演習も含まれています。

4年次は1年間にわたる国際実践教育、すなわち、海外フィールドワーク(海外武者修行)を実施します。国連教育科学文化機関(UNESCO)、経済協力開発機構(OECD)、世界銀行、国連環境計画(UNEP)、世界食糧農業機関(FAO)などの国際機関で調査、政策立案、プロジェクトの実行・交渉・成果発表等を実施し、これらの経験を理論化し、課題解決策や実効的推進策を確かなものにします。

最終年の5年次は集大成として、PBR(プロジェクトベースリサーチ、発展型PBL)、すなわち、学生自らがプロジェクトの企画、立案、実施を企業な

ど外部組織と協働して行います。

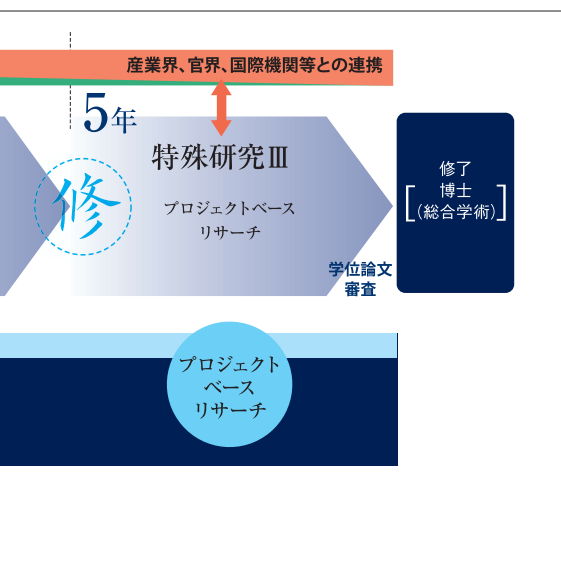
思修館の特徴

思修館が目指すのは、幅広い視野から社会や環境を見通し、課題を見つけ、その解決に向けた強い意志と判断力、実行力を備えた“次世代型リーダー”の育成です。思修館は5年一貫で博士(総合学術)を養成する大学院ですが、大学の研究者育成を目指すものではありません。修了後に国際機関の職員や国・地方自治体の公務員として、あるいは国際的な企業やNGO、NPOで活躍する、また新規で起業するなど、社会にあって実務に携わり、様々な地球規模の課題や地域の課題解決に関わる仕事に就き、社会を変える原動力となる人材の育成を目指しています。現在、他の研究科に所属し、プログラム履修生として思修館で学んでいる学生が5名と大学院が設置された平成25年度の学生(2年生)が10名います。さらに、平成26年4月から16名の1年生が新たに入学しています。このうち、留学生は約2割です。

たとえば、2年生には、法学、経済学、教育学、文学など人文・社会系を専門にする学生と、環境学、薬学など理工・生命系を専門とする学生など、多様な学生が集まっています。メンター・教育指導ならびに研究指導教員による(場合によっては、他研究科から研究指導委託教員を加えた)複数指導教員体制を採り、テラーメイド型教育をサポートしています。

思修館では、学生全員が起臥を共にし、勉強する研修施設を建設し、目標や分野の異なる多様な学生が互いに切磋琢磨し、助け合い、将来にわたって人的ネットワークを築く素地を作っています。また、研修施設では教員が毎日オフィスアワーを設けて日常的に学生の生活指導や教育指導を実施しています。

こうした5年制の博士課程一貫教育を実施するため、思修館は専任教員や研究指導協力教員をはじめ、科目担当教員や研究指導委託教員などの学内協力教員等により構成されており、本学の多くの教職員によって支えられています。皆様のご協力に感謝するとともに、今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いします。



大学の動き

監事が発令される

監事が4月1日付けで文部科学大臣から任命された。任期は平成28年3月31日まで。

◆監事(新任)



丸本 卓哉

◆監事(非常勤)(再任)



奥 正之

株式会社三井住友フィナンシャルグループ取締役会長

副理事が発令される

北野正雄副理事(桂キャンパス担当)の任期満了に伴い、伊藤紳三郎工学研究科長が副理事に4月1日付けで指名された。任期は平成26年9月30日まで。

◆副理事(桂キャンパス担当)



伊藤紳三郎

理事補が発令される

北川 宏理学研究科教授が理事補に4月1日付けで指名された。任期は平成26年9月30日まで。

部局長の交替等

(新任)

文学研究科長・文学部長

川添信介文学研究科教授(思想文化学専攻哲学・宗教学講座担当(西洋中世哲学))が、服部良久文学研究科長・文学部長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



教育学研究科長・教育学部長

子安増生教育学研究科教授(教育科学専攻教育認知心理学講座担当(発達心理学))が、前平泰志教育学研究科長・教育学部長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



経済学研究科長・経済学部長

岩本武和経済学研究科教授(経済学専攻比較制度・政策講座担当(国際経済学, 国際金融論))が, 植田和弘経済学研究科長・経済学部長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**工学研究科長・工学部長**

伊藤紳三郎工学研究科教授(高分子化学専攻高分子物性講座担当(高分子機能学))が, 北野正雄工学研究科長・工学部長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**エネルギー科学研究科長**

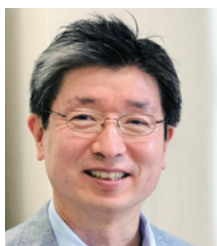
塩路昌宏エネルギー科学研究科教授(エネルギー変換科学専攻エネルギー変換システム学講座担当(熱工学))が, 宅田裕彦エネルギー科学研究科長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**公共政策連携研究部長・公共政策教育部長**

新川敏光公共政策連携研究部教授(公共政策第一講座担当(政治学))が, 岡田知弘公共政策連携研究部長・公共政策教育部長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**ウイルス研究所長**

小柳義夫ウイルス研究所附属ヒトレトロウイルス研究施設教授(ウイルス学)が, 松岡雅雄ウイルス研究所長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**薬学研究科長・薬学部長**

高倉喜信薬学研究科教授(薬学専攻病態機能解析学講座担当(薬剤学, 薬物動態学))が, 佐治英郎薬学研究科長・薬学部長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**人間・環境学研究科長・総合人間学部長**

杉万俊夫人間・環境学研究科教授(共生人間学専攻人間社会論講座担当(グループ・ダイナミックス))が, 富田恭彦人間・環境学研究科長・総合人間学部長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**アジア・アフリカ地域研究研究科長**

小杉 泰アジア・アフリカ地域研究研究科教授(グローバル地域研究専攻持続型生存基盤論講座担当(中東地域研究, イスラーム学))が, 梶 茂樹アジア・アフリカ地域研究研究科長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**経営管理研究部長・経営管理教育部長**

河野広隆経営管理研究部教授(経営管理講座担当(維持管理, 建設材料))が, 徳賀芳弘経営管理研究部長・経営管理教育部長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

**数理解析研究所長**

向井 茂数理解析研究所教授(無限解析研究部門担当(代数幾何学))が, 森 重文数理解析研究所長の後任として, 4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



東南アジア研究所長

河野泰之東南アジア研究所教授(統合地域研究研究部門担当(農学・東南アジア研究))が、清水 展東南アジア研究所長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



地域研究統合情報センター長

原正一郎地域研究統合情報センター教授(高次情報処理研究部門担当(情報学))が、林 行夫地域研究統合情報センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



文化財総合研究センター長

吉川真司文学研究科教授(歴史文化学専攻日本史学講座担当(日本古代史))が、上原真人文化財総合研究センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。

(再任)

医学部附属病院長

三嶋理晃理事(呼吸器内科学)が、4月1日付けで医学部附属病院長に再任された。任期は平成26年9月30日まで。

地球環境学堂長・地球環境学舎長

藤井滋穂地球環境学堂教授(地球親和技術学廊担当(環境工学))が、4月1日付けで地球環境学堂長・地球環境学舎長に再任された。任期は平成28年3月31日まで。

生存圏研究所長

津田敏隆生存圏研究所教授(生存圏診断統御研究系大気圏精測診断分野担当(大気圏科学))が、4月1日付けで生存圏研究所長に再任された。任期は平成28年3月31日まで。

学術情報メディアセンター長

岡部寿男学術情報メディアセンター教授(ネットワーク研究部門担当(高機能ネットワーク研究分野))が、中島 浩学術情報メディアセンター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



高等教育研究開発推進センター長

飯吉 透高等教育研究開発推進センター教授(高等教育教授システム研究開発部門担当(教育イノベーション・高等教育システム))が、大塚雄作高等教育研究開発推進センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



アフリカ地域研究資料センター長

梶 茂樹アジア・アフリカ地域研究研究科教授(アフリカ地域研究専攻民族共生論講座担当(言語学, アフリカ地域研究))が、木村大治アフリカ地域研究資料センター長の後任として、4月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



情報学研究科長

佐藤 亨情報学研究科教授(通信情報システム専攻集積システム工学講座担当(超高速信号処理分野))が、4月1日付けで情報学研究科長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

化学研究所長

佐藤直樹化学研究所教授(複合基盤化学研究系(分子集合解析)担当(有機物性化学))が、4月1日付けで化学研究所長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

経済研究所長

溝端佐登史経済研究所教授(経済制度研究部門担当(比較経済システム論))が、4月1日付けで経済研究所長に再任された。任期は平成28年3月31日まで。

霊長類研究所長

平井啓久霊長類研究所教授(分子生理研究部門遺伝子情報分野担当(分子細胞遺伝学))が、4月1日付けで霊長類研究所長に再任された。任期は平成28年3月31日まで。

学際融合教育研究推進センター長

中村佳正情報学研究科教授(数理工学専攻応用数学講座担当(応用数学))が、4月1日付けで学際融合教育研究推進センター長に再任された。任期は平成28年3月31日まで。

iPS細胞研究所長

山中伸弥iPS細胞研究所教授(初期化機構研究部門担当(幹細胞生物学))が、4月1日付けでiPS細胞研究所長に再任された。任期は平成28年3月31日まで。

平成25年度京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)表彰式を举行

優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰する制度である、京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)の第6回の表彰式を、芝蘭会館稲盛ホールで3月3日(月)に举行した。

表彰式は、最初に、選考委員長である 吉川 潔研究担当理事より、選考経緯に関する報告を交えた開会の挨拶があり、引き続き、たちばな賞学生部門受賞者の片山裕美子氏(人間・環境学研究科博士後期課程3回生)、同賞研究者部門受賞者の王 柳蘭氏(白眉センター特定准教授)に、松本 紘総長より、それぞれ表彰状と記念楯が授与された。続いて、副賞の「ワコール賞」が、株式会社ワコール安原弘展代表取締役社長から贈呈された。また、優秀女性研究者奨励賞学生部門受賞者の奥村優子氏(文学研究科博士後期課程3回生)、同賞研究者部門受賞者の酒

井章子氏(生態学研究センター准教授)にも、同じく松本総長より表彰状が、また安原社長より副賞が贈呈された。

その後、松本総長から、受賞者への祝福の言葉とさらなる活躍を期待するエールが送られ、また、安原社長から、受賞者への祝辞が述べられた。

引き続いて、たちばな賞受賞者による研究発表が行われ、片山氏は「グリーンフォトニクスを実現する希土類イオン添加波長変換材料の設計と発光機構解明」について、王氏は「アジアにおける中国系ディアスポラと多元的共生空間の生成」について発表し、会場の参加者は熱心に聞き入っていた。

最後に、稲葉カヨ男女共同参画担当副学長より、閉会の挨拶があり、盛況のうちに表彰式と研究発表を閉幕した。



左から、松本総長と学生部門受賞者の片山氏、研究者部門受賞者の王氏、安原社長



左から、松本総長と優秀女性研究者奨励賞学生部門受賞者の奥村氏、研究者部門受賞者の酒井氏、安原社長

(研究国際部)

平成26年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の結果

平成26年度入学者選抜学力試験(個別学力検査)の前期日程試験は、2月25日(火)・26日(水)および27日(木)に実施した。

学部・学科別の受験者数、合格者数、入学者数等は次表のとおりである。

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	倍率 (B/A)	第1段階 選抜合格者数	受験者数 (C)	倍率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	追加合 格者数	入学者数
総 合 人 間 学 部	120 ^人	454 ^人	3.8	400 ^人	394 ^人	3.3	6 ^人	1.5%	124 ^人	0 ^人	0 ^人	124 ^人
前期 文 系	65	207	3.2	207	202	3.1	5	2.4	67	0	0	67
前期 理 系	55	247	4.5	193	192	3.5	1	0.5	57	0	0	57
文 学 部 前期	220	647	2.9	647	639	2.9	8	1.2	227	1	0	226
教 育 学 部 前期	60	203	3.4	203	200	3.3	3	1.5	62	0	0	62
前期 文 系	50	159	3.2	159	157	3.1	2	1.3	50	0	0	50
前期 理 系	10	44	4.4	44	43	4.3	1	2.3	12	0	0	12
法 学 部 前期	320	857	2.7	856	842	2.6	14	1.6	332	1	0	331
経 済 学 部 前期	230	719	3.1	680	667	2.9	13	1.9	240	2	0	238
前期 一 般	180	485	2.7	484	474	2.6	10	2.1	190	1	0	189
前期 論 文	25	106	4.2	88	88	3.5	0	0.0	25	0	0	25
前期 理 系	25	128	5.1	108	105	4.2	3	2.8	25	1	0	24
理 学 部 前期	311	805	2.6	795	793	2.5	2	0.3	315	0	0	315
医 学 部 前期	250	673	2.7	658	647	2.6	11	1.7	269	5	0	264
医 学 科 前期	107	326	3.0	311	309	2.9	2	0.6	112	1	0	111
人間健康科学科 前期	143	347	2.4	347	338	2.4	9	2.6	157	4	0	153
看護学専攻 前期	70	159	2.3	159	155	2.2	4	2.5	74	3	0	71
検査技術科学専攻 前期	37	99	2.7	99	96	2.6	3	3.0	41	1	0	40
理学療法専攻 前期	18	39	2.2	39	38	2.1	1	2.6	20	0	0	20
作業療法専攻 前期	18	50	2.8	50	49	2.7	1	2.0	22	0	0	22
薬 学 部 前期	80	232	2.9	231	224	2.8	7	3.0	82	0	0	82
薬 科 学 科 前期	50	123	2.5	122	119	2.4	3	2.5	51	0	0	51
薬 学 科 前期	30	109	3.6	109	105	3.5	4	3.7	31	0	0	31
工 学 部 前期	955	2,867	3.0	2,866	2,835	3.0	31	1.1	970	1	0	969
地球工学科 前期	185	379	2.0	379	—	—	—	—	185	1	0	184
建 築 学 科 前期	80	318	4.0	318	—	—	—	—	82	0	0	82
物理工学科 前期	235	777	3.3	777	—	—	—	—	238	0	0	238
電気電子工学科 前期	130	407	3.1	407	—	—	—	—	133	0	0	133
情 報 学 科 前期	90	341	3.8	340	—	—	—	—	92	0	0	92
工業化学科 前期	235	645	2.7	645	—	—	—	—	240	0	0	240
農 学 部 前期	300	898	3.0	896	884	2.9	12	1.3	314	0	0	314
資源生物科学科 前期	94	—	—	—	—	—	—	—	96	0	0	96
応用生命科学科 前期	47	—	—	—	—	—	—	—	49	0	0	49
地域環境工学科 前期	37	—	—	—	—	—	—	—	40	0	0	40
食料・環境経済学科 前期	32	—	—	—	—	—	—	—	34	0	0	34
森林科学科 前期	57	—	—	—	—	—	—	—	59	0	0	59
食品生物科学科 前期	33	—	—	—	—	—	—	—	36	0	0	36
計	2,846	8,355	2.9	8,232	8,125	2.9	107	1.3	2,935	10	0	2,925

※工学部の学科別志願者数および第1段階選抜合格者数は、第1志望学科の数を示す。

※工学部地球工学科の入学者は、外国人留学生を対象とした国際コースの入学者4人を除く。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果(外数)〕

学 部	募集人員 (A)	志願者数 (B)	倍率 (B/A)	第1次選考 合格者数	受験者数 (C)	倍率 (C/A)	欠席者数	欠席率	合格者数	辞退者数	入学者数
法 学 部	10 ^{人(以内)}	27 ^人	2.7	17 ^人	11 ^人	1.1	6 ^人	35.3%	5 ^人	1 ^人	4 ^人
経 済 学 部	10	27	2.7	15	15	1.5	0	0.0	7	4	3

※受験者数・欠席率は最終教科時における数字である。

(学務部)

平成25年度京都大学総長賞表彰式を挙行

3月17日(月)、学業・課外活動・社会活動等において顕著な活躍をし、京都大学の名誉を高めた学生および学生団体を表彰する「京都大学総長賞」の平成25年度表彰式を、本部棟5階大会議室において挙行了。

今回は全32件の推薦の中から選考の結果、7人と4団体の計11件の受賞者が決定し、表彰された。

表彰状・記念品の授与後に、松本 紘総長が講評を行い、その後各受賞者からプレゼンテーション等が披露され、盛況のうちに終了した。



総長賞受賞者および関係者

受賞者・団体名	分野	受賞理由
理学研究科博士後期課程2回生 石本 健太	学業	流体中の微生物の運動について強い普遍的な力学的制限を与える定理に対し一般的で厳密な証明を初めて与えることに成功し、アメリカ応用数理学会誌に掲載された。
医学研究科博士課程4回生 飯間 麻美	学業	拡散強調MRIを用いた乳癌の新たな非侵襲的診断法の開発に取り組み、Radiology誌を初めとする複数の論文に筆頭著者として論文掲載された。
文学研究科博士後期課程3回生 奥村 優子	学業	乳児がどのように学習するのかを、極めて斬新な方法により明らかにした研究が、国内外から高い評価を得た。また、共同研究においても中心的役割を担い、「乳児における同情的行動」の発表は各種メディアで取り上げられた。
農学研究科修士課程2回生 佐藤 潤一	学業	セルロース系液晶の研究に関して国内外の学会で数多くの発表を行い、国際学会であるICC2012でBiomacromolecules誌よりポスター賞を受賞した。
理学研究科博士後期課程3回生 早瀬 元	学業	柔軟多孔性材料「マシマロゲル」を世界に先駆けて合成し、その研究成果が学術雑誌Angewandte Chemie, International Editionに掲載された。新素材は応用・開発が期待され、ニュートンなどの科学雑誌などで報告された。
京都大学フォーミュラプロジェクト KART(Kyoto Academic Racing team) (代表)工学部物理工学科4回生 大橋 一輝	課外	全日本学生フォーミュラ大会において総合優勝を果たし、部門別でも上位の成績を収めたほか、日本自動車工業会会長賞、ICV総合優秀賞、経済産業大臣賞等を受賞した。
京大短歌 理学研究科修士課程2回生 藪内 亮輔	課外	第58回角川短歌賞を受賞した。
体育会ウィンドサーフィン部 (代表)農学部森林科学科4回生 田中洋太郎	課外	2013年度全日本学生ボードセーリング選手権団体戦において、部創設以来初の優勝を果たした。
体育会陸上競技部 工学部地球工学科4回生 横山 裕樹	課外	「京都マラソン2014」において、初挑戦ながら優勝を果たした。
体育会男子ラクロス部 (代表)総合人間学部4回生 福田 瑞穂	社会活動	所属する男子ラクロス部の練習中に心肺停止した男子学生に対し、4人が連携して、迅速かつ適切な救急措置を取り、人命を救助した。
京都大学東北復興支援学生ボランティア (代表)法学部3回生 谷崎 佑磨	社会活動	大学の事務的支援のもと、学生有志が自主的にボランティアの企画・立案等を行い、現地との信頼関係も築きつつある状況にまで至った。また、シンポジウムやイベントなどを通じて、震災を風化させない活動を行った。

(学務部)

部局の動き

寄附講座・寄附研究部門の設置，更新

4月1日に医学研究科および経営管理研究部・教育部に寄附講座が新設され，医学研究科，農学研究科および経営管理研究部・教育部の寄附講座が更新された。概要は以下のとおりである。

臨床システム腫瘍学講座(新設)	
1. 部 局 名	医学研究科
2. 名 称 (英 名)	臨床システム腫瘍学講座 (Department of Clinical System Onco-Informatics)
3. 寄 附 者	中外製薬株式会社，三井情報株式会社
4. 寄附金額	総額 9千万円
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成29年3月31日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(教授相当) 1名 寄附講座教員(助教相当) 1名
7. 研究目的	京都大学医学部附属病院がんバイオバンクプロジェクトにおいて収集されるがん患者の経時的臨床情報と生体試料に含まれる様々な生物学的情報を統合的に解析する新たな方法論を開発することで，臨床情報を基礎科学に橋渡しするトランスレーショナル臨床情報学の創成とデータ主導型個別化医療の開拓を目指す。これにより，がん患者個人の病態変化・治療効果・副作用の予測，患者個人に最適な治療戦略の合理的推定，および新たなバイオマーカー・創薬ターゲットの探索等を行い，医療の高度化と医薬関連産業の発展に資する。
8. 研究内容	1) 患者個人の病態変化・治療効果・副作用の予測計算モデルの開発 2) 患者個人の治療プロセスを最適化する計算アルゴリズムの開発 3) 実臨床における医療ビッグデータのデータマイニングを可能にする高速処理アルゴリズムの開発
9. 研究課題	1. 経時的臨床情報と生物学的情報の統合解析を可能にする統計モデル・数理モデルの開発 2. 実臨床における医療ビッグデータのデータマイニングを可能にする高速処理アルゴリズムの開発 3. 患者個人の病態変化・治療効果・副作用の予測計算モデルの開発 4. 経時的臨床情報と生物学的情報の統合解析による新たなバイオマーカー・創薬ターゲットの探索 5. 患者個人の治療プロセスを最適化する計算アルゴリズムの開発とそれによる治療戦略・臨床治療戦略の合理的推定
地域医療システム学講座(新設)	
1. 部 局 名	医学研究科
2. 名 称 (英 名)	地域医療システム学講座 (Department of Community medicine supporting system)
3. 寄 附 者	公立小浜病院組合
4. 寄附金額	総額 1億5百万円
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成29年3月31日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(准教授相当) 1名 寄附講座教員(助教相当) 2名

7. 研究目的	<p>1 京都大学医学部附属病院の診療科が、専門医不在ないしは不足している地域の公立病院の常勤医に最新の医療知識を与える機会を定期的に作り、診療科専門医療を遂行し、地域における専門医育成に寄与する。</p> <p>2 ITを利用し、遠隔地における医師と京大病院にいる医師との双方向的なやりとりを可能にし、遠隔診断・遠隔医療支援システムを構築する。</p> <p>3 大学所属の専門医も、豊富な地域症例に関わることにより、専門科のみならず、総合診断能力の維持と向上を目指す。</p>
8. 研究内容	<p>A. 専門医療の遂行と臨床研究</p> <p>B. 専門医の育成とその方法に関する研究</p>
9. 研究課題	<p>1. 専門医療に対する患者側、医療者側のニーズを顕かとする。</p> <p>2. 1が充足した場合に、地域特有の疾病構造を調査し、地域の医療レベルがどのように変化したか検証する。</p> <p>3. 地域で専門医を育成できる体制を構築する。</p>

光亜興産官民協働まちづくり実践講座(新設)

1. 部 局 名	経営管理研究部・教育部
2. 名 称 (英 名)	光亜興産官民協働まちづくり実践講座 (City and Town Management by Public-Private Partnerships)
3. 寄 附 者	光亜興産株式会社
4. 寄附金額	総額 1億円
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成29年3月31日(3年間)
6. 担当教員	<p>寄附講座教員(特定教授) 御手洗 潤</p> <p>寄附講座教員(客員教授) 栗田 卓也</p> <p>寄附講座教員(客員准教授) 平田 研</p> <p>寄附講座教員(客員准教授) 鎌田 秀一</p>
7. 研究目的	産学連携による「まち再生」に向けたトータルな研究を行う。
8. 研究内容	我が国のまちを少子高齢化時代にふさわしいコンパクトなまちへ再生するためにはどのような都市再生手法があるのか、内外のまちづくりの事例を通じて産学官連携による「まち再生」に向けた研究を行う。
9. 研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・都市計画、土地区画整理、都市再生などまちづくり法制度の歴史的・体系的な研究 ・まちづくりに関わる各主体にとっての経済合理性など経済学のアプローチによる研究 ・門真市、長浜市などの全国のまちづくり事業やエリアマネジメント等を事例として取り上げ、事例の調査・分析と他の地域への応用に関する、自治体や民間事業者、地元まちづくり関係者等との共同による研究

臨床腫瘍薬理学講座(更新)

1. 部 局 名	医学研究科
2. 名 称 (英 名)	臨床腫瘍薬理学講座 (Department of Clinical Oncology and Pharmacogenomics)
3. 寄 附 者	株式会社 ヤクルト本社
4. 寄附金額	総額 9千万円
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成29年3月31日(3年間)

6. 担当教員	寄附講座教員(特定准教授) 松本 繁巳 寄附講座教員(特定講師) 金井 雅史
7. 研究目的	臨床腫瘍学領域の薬物療法の効果や副作用に関して、ゲノム薬理学的観点から個別化医療の確立・普及を目標とし、最終的にがん治療の進歩に資することを目的とする。
8. 研究内容	癌薬物療法の進歩のための①病態関連の遺伝子についての研究、②遺伝子多型と薬剤に対する反応性の研究、③遺伝子検査による薬剤反応性を予測する研究など、PGxを用いた個別化治療を推進し、癌薬物療法を安全かつ有効に投与する方法論を確立する。
9. 研究課題	1. オキザリプラチンに関するゲノム薬理学研究 2. イリノテカンに関するゲノム薬理学研究 3. 臨床腫瘍学におけるゲノム薬理学研究の拠点形成のための基盤整備と多癌腫に対する網羅的解析システムの構築

リウマチ性疾患制御学講座(更新)

1. 部 局 名	医学研究科
2. 名 称 (英 名)	リウマチ性疾患制御学講座 (Department of the Control for Rheumatic Diseases)
3. 寄 附 者	田辺三菱製薬株式会社, エーザイ株式会社, 中外製薬株式会社, ブリストル・マイヤーズ株式会社
4. 寄附金額	総額 1億5百万円
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成29年3月31日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定教授) 藤井 隆夫 寄附講座教員(特定助教) 橋本 求 寄附講座教員(特定助教) 布留 守敏
7. 研究目的	1) 関節リウマチ(Rheumatoid Arthritis:RA)に関する基礎研究を充実させること 2) RA治療の最適化に関する臨床的エビデンスの確立 3) RA診療に精通した看護師や薬剤師の育成 4) 地域医療への貢献
8. 研究内容	1) KURAMA コホートによる臨床疫学研究 2) KURAMA コホートとバイオバンクを用いた臨床免疫学的研究
9. 研究課題	1. 全身性リウマチ性疾患における自己抗体の臨床的意義 2. 関節リウマチの生物学的製剤の免疫原性と自己免疫との関連に関する研究 3. 関節リウマチおよびその動物モデルにおけるGM-CSF産生CD4T細胞の役割 4. 関節リウマチと歯周病に関する臨床免疫学的研究 5. 間質性肺炎の病態におけるinflammasomeの関与 6. 関節リウマチにおけるメタボロミクスによる疾患活動性マーカーの探索

産業微生物学講座(更新)

1. 部 局 名	農学研究科
2. 名 称 (英 名)	産業微生物学講座 (Industrial Microbiology)
3. 寄 附 者	微生物産業関連企業
4. 寄附金額	更新にかかる寄附金なし(残額による運営)
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成28年3月31日(2年間)

6. 担当教員	寄附講座教員(客員教授) 高橋 里美 寄附講座教員(特定助教) 日比 慎 寄附講座教員(特定助教) 櫻間 晴子
7. 研究目的	日本の産業の中でも長い伝統と高い技術力を有する応用微生物学領域の研究をさらに推進し、その基盤的技術の確立を目指すとともに、関連する学術・産業界で活躍できる人材の育成を行う。特に、微生物機能を生かした生産技術の将来のシーズとなるいくつかのテーマについて基礎・応用の両面から研究する。
8. 研究内容	微生物機能を生かした物質生産技術のシーズとなるいくつかのテーマに関して、自然界からの探索(スクリーニング)・酵素機能の解明・遺伝子の解析・反応および生産条件の設定等の検討を行い、生産プロセスの構築を行っていく。これらの技術開発の過程を通じて、大学院教育の場における基礎知識および実験技術の取得だけではなく、研究開発能力を持つ人材の育成が期待できる。
9. 研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・医薬品等の合成に有用な精密化学品製造技術の開発 ・機能性食品素材として有望な新規油脂の微生物生産 ・環境汚染物質の微生物分解と物質生産への応用 ・バイオマス原料からの化成品ならびに燃料生産 ・植物生育促進に有効な微生物機能の開発

企業金融(みずほ証券)講座(更新)

1. 部 局 名	経営管理研究部・教育部
2. 名 称 (英 名)	企業金融(みずほ証券)講座 (Corporate Finance (Mizuho Securities) Endowment)
3. 寄 附 者	みずほ証券株式会社
4. 寄附金額	8千万円(2年間分)
5. 設置期間	平成26年4月1日～平成31年3月31日(5年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(客員教授) 砂川 伸幸 寄附講座教員(客員教授) 岩城 秀樹 寄附講座教員(客員教授) 熊谷 五郎 寄附講座教員(客員教授) 佐山 展生 寄附講座教員(客員教授) 白須 洋子 寄附講座教員(客員教授) 御立 尚資
7. 研究目的	今後の日本産業の再生と発展を目指した構造改革に取り組むための具体的な方法およびその意思決定支援の方法を、広く経済学および経営学の立場から研究し、日本経済の国際競争力の復活に貢献する。
8. 研究内容	日本における企業金融の制度的、行動的特質を、経済学および経営学の立場から理論的、体系的に考察し、その分析結果に基づいたより効率的な企業金融システムの具体的なモデル開発を目指す。
9. 研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の企業金融システムの制度的特質を、金融機関と産業企業との視覚から、国際比較のアプローチから考察する。 ・日本の企業金融の諸側面を、効率性の観点から経済学的に分析して、具体的な問題点を明確化する。 ・新しい企業金融のシステム設計を、経営学的な手法によって開発して、効率的な企業金融モデルの設計を行う。

寸言

“C&C”と VISIONARY

秋津 勝彦

京都の街から市電が姿を消した翌年の1979年に経済学部を卒業し、NECに入社してから早いもので35年が過ぎた。

その2年前、技術革新の進展によって、アトランタのインテルコム'77において、当時のNEC小林宏治会長が提唱したコンセプトが“C&C”(コンピュータと通信の融合)である。C&C発展の道筋を、デジタル化の軸とシステム化の軸で、ロードマップとして示したのがC&Cチャートで、コンピュータと通信の融合を可能にしたのが半導体集積技術の進歩である。

C&Cの先に「高度情報化社会」の到来を見据え、小林会長が描いたビジョンを組織体制や事業戦略に具体的に落とし込み、C&Cを全社的に推進していったのが当時の関本忠弘社長である。関本社長は講演会等で、通信、コンピュータ、半導体の3つの分野で、それぞれ世界ランキング10位以内の企業は、唯一NECだけだという話をよくされていたが、その3分野こそC&Cチャートで示された事業領域に他ならない。NECが進むべき事業の方向性はC&Cチャートに明確に示され、社内でも共有されていたのである。

小林会長は「経営者の心得」という形で経営哲学をまとめ、いろいろな機会に情報発信してきた。関本社長は「ベタープロダクツ・ベターサービス」に代表される、創業以来変わらない基本理念、事業運営の基本的考え方や経営哲学などを社内、社外いろいろな場で熱く語り継いできた。そのエッセンスを関本語録としてまとめたのが「マネジメント雑感」。「新・マネジメント雑感」である。こうしたNECのトップ・マネジメントの基本的考え方は、歴代の会社経営幹部層に暗黙知として刷り込まれ、受け継がれてきた。

2年前、再建計画を実行せよということで、日本



アビオニクスに移った。日本アビオニクスはNECとヒューズ・エアクラフト・カンパニー(現レイセオン)との合併会社として1960年に設立された。

3か月の社長待命の準備期間に読み返したのが、ジム・コリンズのビジョナリー・カンパニーの3部作と、小林会長の経営の考え方に大きな影響を与えてきたピーター・ドラッカーの著作。改めていろいろな発見があったが、NECはC&Cというビジョンが明確だっただけでなく、行動指針となる事業運営の考え方や、基本理念がDNAとして継承され、ビジョナリー・カンパニーに近かったのだと思う。

21世紀を迎え、インターネット革命の進展によりICT(情報通信)業界は断層の時代ともいえるべき大きな構造変化を経験し、競争環境も激変した。事業の方向性は変わっても、根底にある暗黙知としてのNECのマネジメントの基本的考え方の中には、今の時代にあっても通用する不易な指針、普遍的な内容も少なくないと思っている。

NECに入社してNTT向け局用交換機の営業を担当した後、企画部に異動し、トップサポートを長く経験させていただいた。ともかく当時のトップは社内外での講演や講話、渉外活動が多かったのである。また、関本社長の後の金子尚志社長、西垣浩司社長の新社長就任のスピーチ原稿も書かせていただいた。企画部時代の上司が3人続けて京大出身だったことも何かの縁かもしれない。こうした経験を通して、NEC時代に学んだことが、今もいろいろな場面で役に立っている。

日本アビオニクスの経営のかじ取りを任されて、残念ながら未だに会社の進むべき方向性を示すビジョンを打ち出すまでには至っていないが、折に触れ、どうすべきか悩んだとき、困ったときには、「経営者の心得」、「マネジメント雑感」などを指針として、必ず原点に立ち返るよう心掛けている。

まだまだ分からないことだらけである。

(あきつ かつひこ 日本アビオニクス代表取締役執行役員社長、昭和54年経済学部卒業)

随想

IT を使って過去から未来を読む

名誉教授 星野 聡

チャールズ・ディケンズが主宰した、19世紀イギリスの週刊誌ALL THE YEAR ROUND (AYRと略記)の20巻から、小説以外の当時の啓蒙記事666件を選んで読んでいます。その中身は、今我々が見慣れている週刊誌とは異なり、細かい文字が一杯詰まっていて、挿絵は殆どありません。



さて日本では、イギリスの政治制度を研究し、いろいろ取り入れる努力がされて来ました。しかし、インターネットを利用して、よく観察すると、表面上は似ていても、中身はかなり違っていることもあります。また、英国では、政策には単純さを求め、事実に基づいた立証を重んじ、コンサルティングに基づいて社会の合意を求めるプロセスが定着しています。住民自身や自治体・官庁の行政・教育、歴史・文化などへのインターネットの取り組みも熱心です。ところで、これらの素地がいつ頃から育ってきたか知りたくなって、私は19世紀の産業革命時代に目を付けました。それがAYRを読み始めたきっかけです。

私は、会社を退職した人が、起床してから朝食までの間、何もすることがなくて困っているという話を聞いたことがあります。新聞を隅々まで読んでも暇を持て余すというのです。しかし、私にはその心配はありません。読むべきAYRの興味深い記事が沢山あるからです。ところが、この週刊誌には注釈が全くないので、いつも意味が分からない箇所に出づかります。しかし今はインターネットという道具があります。しかも、このインターネットは最近1～2年の間に素晴らしく成長しました。例えば、AYRに出てくる書物は、19世紀に出版された地理・歴史・医学・経済・軍事・言語・物理・生物などの広い分野にわたり、イギリス以外の国のこともあり、大抵は全く聞いたことがない書物です。しかも以前

は希少本のため入手閲覧が困難だったかもしれませんが。ところが殆どの場合、その内容を書斎のPCにダウンロードして、読むことも、プリントして簡易製本することも容易にできるのです。そこで例えば、AYRで引用されている内容を、原典でチェックすることが、大きな図書館に行かなくてもできるのです。このような可能性は、数年前までは全く期待できませんでした。一例として、ある地方特有の舞踊は、普通の辞書には見えないことが多く、また仮に辞書にあったとしても、文字だけではどんな舞踊であるか素人にはよく理解できません。しかし、YouTubeにその動画が入っていると、よく分かるのです。このような可能性も以前は全く考えられなかったことです。なお、私はインターネット以外にも、いろいろな資料を参考にしています。たとえば、辞書はOED(CD版)、ロンドンの詳しい市街図は、18世紀末のホーウツの地図なども参照しています。

私は、記事から現代社会や教育などについて、さらに未来についても何らかの示唆を読み取りたいのです。当時は、電気照明、ラジオや飛行機などありませんでしたが、すでに現在と共通の社会問題が起こっていました。今よりも深刻だったとも言えましょう。

では、イギリスでインターネットの内容を誰が充実させているのでしょうか。万事お金という言葉があります。これが答えでしょうか。金の切れ目は縁の切れ目とも言いますね。AYR 3巻534ページを読んでいて気が付いたのですが、「キリスト教だけが東洋人を無気力から目覚めさせる」と言っています。今はこの記事が書かれた時とは背景が違いますが、インターネットの隠れた原動力の一つは、キリスト教的な心情がその根底にあるのではないのでしょうか。これは一つの仮説です。AYRは、1870年ディケンズが没した後も、1895年まで続けました。幸い、インターネットで、そのテキストを読めるようになりました。これには全く驚きましたが、そのためには、よほど長生きしなくてはならないのです。

(ほしの さとし 平成7年退職 元大型計算機センター教授 専門は情報、IT)

洛書

「バブル」との出会い

翁 邦雄

4年ほど前、朝日新聞から取材申し込みがあった。「検証・昭和報道」という連載で、バブルについて取り上げます。『バブル』という言葉が日本に持ち込んだ翁さんに当時のことを振り返って論じてほしい」という。

確かに、『バブル』という言葉を持ち込んだのだが、残念ながら私に先見の明があったわけではない。私の「バブルとの出会い」は早すぎたのである。

1982年の夏、当時、日銀に在籍し、シカゴ大学に派遣留学中だった私は、ある論文にオマケのように書かれていた短い記述に引き込まれた。株や土地などの資産価格は、自己実現的な期待によりシャボン玉が大きく膨らんで破裂するような不思議な動きをすることがある。これをバブルと呼ぶ、という。博士号を取る、と言って留学延長を許可されたものの、その実、卒論のテーマに困っていた私は、これに魅了されて飛びついた。為替市場に関連づけて卒論をまとめ、日本に帰ったあと、続きの論文を幾つか書き、オランダのチューリップ投機や英国の南海泡沫事件など、歴史的に有名な事例の紹介等を加えて本にしたのは、1985年の夏である。

しかし、この年はドル高是正の国際合意(プラザ合意)があった年である。日本経済は円高不況で急速に冷え込み、熱気に満ちたバブルの対極にあった。書いた本は賞をもらい、バブルという言葉は少しずつ広がっていったが、学界、日銀内双方から異なった理由で異端視され、私もバブルから離れていった。

学界で異端とされた理由は、バブルは、発生の機序を説明するのが難しいうえ、その存在を認めると経済の均衡点が一つに決まらなくなる、という理論家にとってきわめて不都合な存在であることによる。現在でも、例えば昨年ノーベル賞を受賞したユージン・ファマ(シカゴ大学)のインタビューを読むと、バブルという言葉、概念への嫌悪感が露わで興味深

い。バブルは正統的な経済学の枠内にうまく収まらないのである。

日銀内で異端とされた理由は「政策を考えるうえで全く役立たない」というものだ。今ではこの批判は的外れに聞こえるだろうが、一時神格化されていた米国・連邦準備制度理事会のアラン・グリーンスパン議長も、金融危機前には「バブルにはさわらず、崩壊してから後始末すべきだ」と主張していた。どう対処するのが正解なのかは今でも議論が分かれている。

しかし、私がバブルの研究から離れた後、地価や株価は急速に上がり始める。検証・昭和報道の記事によると、そのころ朝日の記者は私の本を読み「こういうのを『バブル』っていうらしいぜ」と同僚と話したという。そして、1987年2月、日銀が内需刺激のため金利を引き下げた際、朝日新聞は「異常に膨らんだ『アブク銭相場』の上に成り立つ見せかけの活況は揺りもどしも大きい。目先の利益を追いつづけることが、将来の危機を日々増殖させている、ともいえる」とバブルを懸念した論評を掲載する。しかし、この時点では、バブルはまだ専門用語だった。やむなく朝日新聞は一般読者に耳慣れない「バブル」を使うのは避け、「アブク銭」と言い直したという。やがて日本経済はバブルの壮絶な崩壊へと突入し、バブルという言葉は人口に膾炙する。

振り返ってみて、バブルについてもう少し辛抱強く語り続けるべきだったと思う。それでも世の中はほとんど変わらなかっただろう。バブルは、空っぽのシャボン玉ではなく、人々の期待と熱気がどんどん詰め込まれ膨張が加速する巨大な熱気球で、しばしば制御不能になる。しかし、それでもリスクを少しでも社会に刷り込む努力をすべきだったと思う。

世の中が同じ方向を向いた思い込みに突き動かされているときに、大きなリスクがあるのはバブルに限らない。そうしたとき、誰かが、人々が聞いたがらないことを辛抱強く語り続ける必要があると自省の念を持ちつつ、痛感している。

(おきな くに お 公共政策連携研究部・教育部教授 専門は国際経済学、金融政策論)



栄誉

中島 啓数理解析研究所教授，田中紘一名誉教授が日本学士院賞を受賞

このたび、中島 啓数理解析研究所教授，田中紘一名誉教授が日本学士院賞を受賞された。授賞式は、7月に日本学士院で行われる予定である。以下に各氏の略歴，業績等を紹介する。

中島 啓教授は、昭和62年東京大学大学院理学研究科修士課程修了，同年同大学理学部助手として採用，平成3年に理学博士(東京大学)を取得，その後，同4年東北大学理学部助教授，同7年東京大学大学院数理学研究科助教授，同9年京都大学大学院理学研究科助教授，同12年同教授を経て，同20年に同大学数理解析研究所教授に就任し，現在に至る。また，数理解析研究所の量子幾何学研究センター長を併任している。

今回の日本学士院賞の受賞題目は「幾何学的表現論と数理解析物理学」である。同教授はこの両分野において世界的リーダーとして高く評価されている。

数学や物理における最も重要な主題の一つは“対称性”であり，幾何学的な手法を用いて対称性を研究するのが幾何学的表現論である。同教授は^{えびら}多様体という図形を用いる手法を創出し，従来の手法では捉えられなかった対称性の研究に成功し，幾何学的表現論に変革を引き起こした。この研究で導入された，多様体の無限列に潜む対称性を抉り出すという同教授のアイデアは，思想的にも極めて独創的である。また，同教授によって発見された多様体



は，現在では様々な分野で重要な役割を果たしている。対称性と多様体の関係は，物理学における双対性の探求にも大きな影響を与えた。

さらに，同教授は吉岡康太神戸大学教授との共同研究でネクラソフ予想を解決し，4次元ユークリッド空間の超対称性ゲージ理論の“プレポテンシャル”を，数学的な意味で厳密に基礎づけた。これは，物理学者たちによる超対称性ゲージ理論の幾何学への応用を，数学的に正当化する道を切り開くものでもあり，数理解析物理学・幾何学に大きな進展をもたらした。これを基にして，同教授は吉岡教授，ロタールゲッチェ国際理論物理学センター(ICTP)教授との共同研究で，射影曲面に関するドナルドソン不変量の壁越え公式やウィッテン予想などの歴史的難問を次々と解決した。

同教授の卓越した数学的業績に対し，これまでも平成9年日本数学会幾何学賞，同12年日本数学会賞春季賞，同15年アメリカ数学会コール賞，同18年日本学術振興会賞など，多数の賞が授与されている。

今回の日本学士院賞の受賞はこれらの業績に対して贈られたものであり，誠に喜ばしい。

(数理解析研究所)

田中紘一名誉教授は，昭和41年京都大学医学部を卒業，同年同大学医学部附属病院において実地修練の後，外科学教室に入局，同53年に同助手，同60年同大学医学部講師，平成6年同助教授を経て，同7年同大学院医学研究科教授に就任，移植免疫医学分野を担当，同13年からは4年間にわたり同大学医学部附属病院長を併任された。



平成17年3月に定年退職の後，先端医療振興財団副理事長および先端医療センター長，神戸市立医療センター中央市民病院副院長，同技術顧問，神戸国際医療交流財団理事長，先端医療振興財団技術顧問などを歴任され，神戸国際フロンティアメディカルセンター理事長を務められている。

今回の受賞研究題目は，「生体肝移植の基礎研究および臨床開発と展開に関する研究」である。同名誉教授は，脳死移植が困難なわが国で，肝臓の臓器特異性に着目して基礎研究を行い，生体肝移植がヒ

トに応用できる可能性を示した。その上で、生体肝移植を肝疾患末期患者の根本的治療として展開してきた。手術手技の開発と周術期管理の工夫により、新生児から成人への適応を可能とし、移植肝の生着に影響する諸因子およびドナー安全性に関する諸因子を分析して課題を克服し、良好な成績を示した。この間、新しい免疫抑制剤の臨床応用、移植後の免疫寛容の発現、B型肝炎ウイルス既感染ドナーからの移植後に肝炎が発症することとそのメカニズムの解明、ABO不適合移植の病態解明とその対策、家

族性アミロイドニューロパティ患者の肝臓を用いるドミノ肝移植、肝癌に対する移植適応の拡大等の臨床研究を通して、移植免疫学と肝臓病学に新たな道を拓いた。同名誉教授は、わが国のみならず、9か国で生体肝移植の導入に協力し、本法の普及と定着に努めておられる。

今回の日本学士院賞の受賞はこれらの業績に対して贈られたものであり、誠に喜ばしい。

(大学院医学研究科)

稲葉カヨ 男女共同参画担当副学長・生命科学研究科教授がロレアル・ユネスコ女性科学賞を受賞

このたび、稲葉カヨ 男女共同参画担当副学長・生命科学研究科教授がロレアル・ユネスコ女性科学賞を受賞され、授賞行事が3月16日(日)から19日(水)までの期間、フランス・パリで行われた。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

稲葉教授は、昭和48年奈良女子大学理学部生物学科を卒業、同53年京都大学大学院理学研究科博士課程を修了され、同年同学部助手、平成4年同助教授(女性初)、同7年同大学院理学研究科助教授を経て、同11年同大学院生命科学研究科教授となられた。平成15年から同16年に同研究科長(女性初)を務め、同19年に女性研究者支援センター長、同25年からは副学長(男女共同参画担当)としても活躍されている。また昭和57年から米国ロックフェラー大学客員助教授、准教授を経て、平成11年から同大学客員教授を務めておられる。

同教授が今回受賞された「ロレアル・ユネスコ女性科学賞」は、世界最大の化粧品会社ロレアル社と国際連合教育科学文化機関(UNESCO)とが世界規模での女性科学者の地位向上を目的として、平成10年に創設した研究褒賞である。以来、長期的



視野に立って、科学分野の発展に貢献した女性科学者の功績を称えてきた。そして本年、「正常時ならびに疾患時における免疫システム内の樹状細胞の主要な役割の解明への貢献」を讃えて、同教授を受賞者の一人に選出した。

ワクチン接種の歴史は、天然痘の感染予防として19世紀初頭から始まっていたが、近年に至るまで、ワクチンの作用機序、すなわち生体における免疫応答のしくみは未解明のままであった。この課題に対し、樹状細胞が「免疫システムの司令塔」として働くことを実証して解決へと導いた研究者の一人が稲葉



ソルボンヌ大学での表彰式にて

教授である。また同教授は、樹状細胞を生体から取り出して、異物を取り込ませて再び生体内に投与することで、異物への免疫反応を選択的に促進できること、かつ、正常時には自己に対して免疫反応を起こさないように制御する作用を持つことを証明された。さらに、樹状細胞になる前段階の細胞を骨髄から抽出して試験管内で培養し、樹状細胞へと増殖・分化させる手法も確立された。これは樹状細胞を用いた新しい抗がん治療や細胞療法の道を拓く成果である。ロレアル・ユネスコ女性科学賞の授賞は、こうした同教授の一連の業績を世界的に高く評価したものであり、誠に喜ばしい。

なお授賞行事は4日間にわたり、18日にはフラン

ス科学アカデミーで各受賞者による有識者向けの厳粛な研究業績解説が、19日にはソルボンヌ大学にて、盛大かつ華やかな表彰式が行われた。それらの合間に設けられたメディア・インタビューでは、日本、欧州をはじめとした世界各国の新聞や雑誌、TV・ラジオ局の取材陣から、同教授の女性研究者支援・育成活動に対しても、注目と称賛の声が寄せられた。



フランス科学アカデミーにおいて
(提供：ロレアル)

ア・インタビューでは、日本、欧州をはじめとした世界各国の新聞や雑誌、TV・ラジオ局の取材陣から、同教授の女性研究者支援・育成活動に対しても、注目と称賛の声が寄せられた。

(大学院生命科学研究科)

話題

ベトナム教育訓練省代表団一行が、地球環境学堂・学舎を訪問

2月20日(木)に、フィ・ヴァン・ガー教育訓練省副大臣をはじめとするベトナム教育訓練省代表団一行が、本学を訪問された。

地球環境学堂・学舎では、一行8名を迎え、特別ワークショップを開催した。学堂・学舎の教職員、ベトナム人留学生、ベトナムで長期インターンシップを経験した日本人学生のほか、遠隔会議システムを利用し、学堂・学舎が海外拠点オフィスを置く、ハノイ理工科大学、フエ農林大学、ダナン工科大学からも参加があり、総勢48名が出席した。藤井滋穂地球環境学堂・学舎長より、地球環境学堂・学舎の特色、これまでのベトナムでの教育・研究活動実績、

これからベトナムで新たに実施を計画しているプロジェクトについて説明があり、ガー副大臣からは、期待の言葉をいただいた。

ワークショップ後の歓迎パーティーには、門川大作京都市長も駆けつけ、世界歴史都市連盟を通じた京都市とフエ市との大切な関係について話された。

多数参加したベトナム人留学生にとっても、母国要人と積極的なディスカッションを行うなど、貴重な経験を得る機会となった。学堂・学舎にとっては、これまで積み上げてきたベトナムとの交流のもと、さらに友好関係を深める有意義な機会となった。



ベトナム教育訓練省代表団



門川市長を迎えた歓迎パーティー

(大学院地球環境学堂・学舎)

平成25年度京都大学防災研究所「研究発表講演会」を開催

防災研究所は、平成25年度京都大学防災研究所研究発表講演会を2月27日(木)から28日(金)までの期間に、宇治おうばくプラザをメイン会場として開催した。



第1回DPRI Award授賞式

27日は、大志万直人防災研究所長の挨拶に続き、第1回DPRI Award授賞式が執り行われ、金森博雄カリフォルニア工科大学名誉教授に賞状と記念品が授与された。続いて、金森名誉教授による受賞記念講演「巨大地震の多様性とそれに応じた減災対策」、堀宗朗東京大学地震研究所巨大地震津波災害予測研究センター教授による招待講演「大規模数値計算の地震工学への適用可能性」が行われた。

午後からは、災害調査報告「台風18号の豪雨災害と日吉ダムの洪水調節効果」(角哲也教授)、「台風26号による伊豆大島の斜面崩壊」(寺嶋智巳准教授)、「台風Haiyanによるフィリピンレイテ島の高潮災害」(安田誠宏助教)と題して3件の災害の実情が報

告された。

両日に行われた研究発表の一般講演は、5会場に分かれ、総合防災、地震・火山、地盤、大気・水、グローバルCOEのテーマ別に、最新の研究内容が紹介され、ポスターセッションでは活発な意見交換が行われた。2日合わせて、一般市民、自治体職員、民間企業、学内研究者等延べ380名を超える参加者があった。

また、若手研究者の積極的な参加と発表を促し、研究を奨励するとともに、研究発表講演会の一層の活性化を図ることを目的として「防災研究所研究発表講演会優秀発表賞」の表彰を行い、発表内容が優れていた12名の研究者・大学院生に大志万所長から表彰状が授与された。さらに今年は、その中でも特に秀逸と認められた野口峻佑理学研究科博士後期課程1回生(防災研究所災害気候研究分野)に、研究奨励賞(研究費助成)が贈られた。



大志万所長と優秀発表賞受賞者

(防災研究所)

女性研究者支援センター主催・介護に関する講演会シリーズ(第4回)を開催

3月1日(土)、女性研究者支援センター主催の講演会「介護する家族にとってのターニングポイント」を南部総合研究1号館、再生研西館共同セミナー室1において開催した。

ある日突然家族が病いに倒れ、介護が自分の問題となった時のために、介護を経験した人もそうでない人も、それぞれの立場から一緒に介護を考えてみることを目的とし、男女共同参画推進室との共催で事業を行った。

鈴木和代育児介護WG推進員の司会進行により、



講師の川口有美子氏

はじめに、犬塚典子女性研究者支援センター特任教授より講師の紹介と開会の挨拶があった。そして、川口有美子氏(有限会社ケアサポートモモ・代表取締役)より、「介護する家族にとってのターニングポイント」の講演があった。

講演では、講師が難病のALSに罹患した母親の介

護に13年間携わってきた経験や、その経験をもとに会社の設立やNPO法人を立ち上げたエピソードなどの興味深い内容が語られた。

講演会に続いて、円座になり、講演者と参加者の交流会を開催した。教職員、学生、また参加者や難

病支援センターの方々が、さまざまな角度から現在の悩みや、これからの制度のあり方などについて、話題提供・意見交換を行った。

(女性研究者支援センター)

女性研究者支援センター主催・ストレスマネジメント講座を開催

女性研究者支援センターでは、男女共同参画推進室との共催で、ストレスマネジメント講座「仕事に、学問に、恋をして(エンゲイジして)、あなたに、京



会場の様子

都大学に、活力を！」を、3月7日(金)、文学部第6講義室にて開催した。

講座では、島津明人東京大学大学院医学系研究科准教授より「ワーク・エンゲイジメントに注目した個人と組織の活性化：より健康でより高いパフォーマンスに向けて」をテーマに講演があった。

また、個人ワーク、ペアワークを行い、ストレスとの上手な付き合い方や、健康を維持し、パフォーマンスを上げるために有効な知識・技術を習得した。

※2014年4月1日から女性研究者支援センターは、組織改組により男女共同参画推進センターになりました。

(女性研究者支援センター)

訃報

このたび、^{よこ お と し の ぶ}横尾俊信教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

横尾 俊信 教授



横尾俊信先生は、2月25日逝去された。享年64。

先生は、昭和47年3月東北大学工学部を卒業後、同54年10月同大学大学院工学研究科博士課程を修了し、同大学工学博士の学位を授与された。

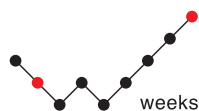
昭和54年11月米国レンスレー工科大学理学部化学科研究員、同56年12月三重大学工学部助手、同59年5月同助教授を経て、同63年4月京都大学化学研究所助教授、平成6年7月教授に就任された。

先生は、永年にわたって無機材料化学、中でもガ

ラス科学の教育、研究に努めてこられた。研究では、溶融塩の物性と電気化学、ガラスの構造と物性、ゾルーゲル法による機能性材料の合成、TiO₂薄膜の光触媒機能性と太陽電池への応用、新規有機-無機ハイブリッド低融点ガラスの開発と応用、新規な希土類フリー発光体の創製などについて数多くの研究を展開され、これらの分野の発展に大きく貢献された。

また、日本セラミックス協会ガラス部会長、同基礎科学部会長を歴任されるなど、学会活動にも献身された。教育の分野では、後進の熱心な指導を行われ、多数の有能な人材を育成された。

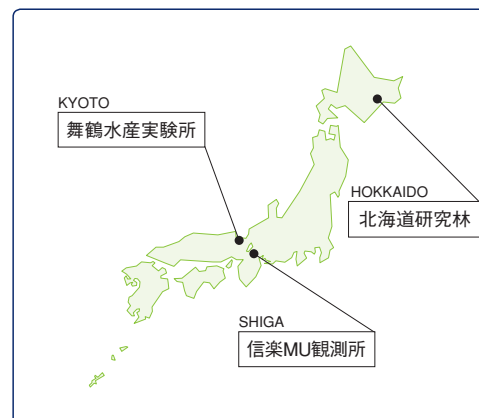
(化学研究所)



京大ウィークス2013 Vol.5

「京大ウィークス」は、京都大学が日本全国各地に数多く所有する、多様な隔地施設の活動を学内外に紹介することを目的に、従来からそれぞれの施設で行ってきた公開イベントを、毎年秋の一定期間に集中して行う企画である。今年度は、21の施設が参加して10月12日(土)から11月9日(土)までの期間で実施した。

今号では、生存圏研究所の「信楽MU観測所 MUレーダー 一般講演会」、フィールド科学教育研究センターの舞鶴水産実験所企画展「赤れんがフェスタ2013 in舞鶴(高等教育機関等合同PRフェア)」および「北海道研究林白糠区 ミニ公開講座「自然観察会」」を紹介する。



信楽MU観測所 MUレーダー 一般講演会

生存圏研究所 信楽MU観測所(滋賀県甲賀郡信楽町)のMUレーダーは、世界最高性能かつアジア域最大の大気観測用大型レーダーで、昭和59年の完成以来、国内外の研究者に対して共同利用に供され、気象から超高層に至る地球大気現象の解明に貢献している。平成23年、24年に実施し好評であった信楽MU観測所の見学ツアーを今年も予定していたが、9月に関西地区を襲った台風18号の影響により信楽MU観測所へのアクセス道路が危険な状態となったため、イベントの内容を変更し、10月26日(土)に甲賀市信楽伝統産業会館において一般講演会を開催した。当日は、「レーダーを使って大気を測るー信楽とインドネシアからの研究紹介ー」、「レーダーで見る集中豪雨と竜巻の姿」の2件の講演を行い、44名の参加があった。参加者からは多くの質問が寄せられ、講演会は予定の時間を超過して、好評のうちに終了した。



講演会を熱心に聞き入る参加者ら



山本 衛教授による講演の様子

舞鶴水産実験所企画展「赤れんがフェスタ2013 in舞鶴(高等教育機関等合同PRフェア)」への出展

フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所(京都府舞鶴市)では、舞鶴市内で行われる大きなイベントの一つである「赤れんがフェスタ2013 in舞鶴」に、市民に広く実験所の活動を知っていただくことを目的として、実験所紹介展示とタッチプールを出展した。

10月26日(土)、27日(日)に開催予定のところ、台風27号の影響により27日のみの開催となったが、実験所の展示ブースとタッチプールには、延べ1,232名が訪れた。

展示ブースでは、実験所の一般的な紹介に加え、大学院生による研究紹介、舞鶴湾の魚の水槽展示、実験所の調査で採集した稚仔魚の展示を行い、実験所の活動を紹介するとともに、タッチプールでは、アサリやナマコといった身近な舞鶴湾の生き物に触れる機会を提供した。

当日は、子ども連れの来場者が多く、身近にありながら普段目にするのことができない生き物に触れることができるタッチプールは好評であった。また、学生による研究紹介についても、来場者から「丁寧な説明が一般にも分かりやすい」との評価を得た。



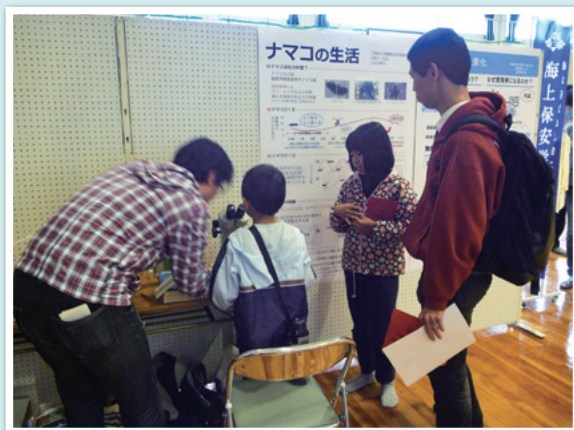
展示ブースの様子



舞鶴湾の生き物に触れることのできるタッチプール



舞鶴湾の水槽展示



顕微鏡による仔稚魚の観察コーナー

北海道研究林白糠区 ミニ公開講座「自然観察会」

フィールド科学教育研究センター 北海道研究林白糠区(北海道白糠郡白糠町)において、10月27日(日)にミニ公開講座「自然観察会」を開催した。

白糠町公民館前広場での開校式の後、参加者はバスで研究林に移動し、3班に分かれて樹木や森林について解説を受けながら自然観察を行った。午後には、丸太を使ったコースター作り、落ち葉を使ったしおり作り、林業体験などを行った。

当日は定員を超える39名の参加があり、参加者からは、「色々な体験が出来て良かった」、「自然に触れることが出来て良かった」、「自分の知らないことが多く学べて楽しい内容だった」などの声が寄せられた。



自然観察での天然生トマトの解説



自然観察でのキタコブシの木の果の解説



丸太を切断しコースターを作成



ネイチャークラフトでは落ち葉でしおりを作成